

『伊勢源氏十二番女合』序文攷

安 達 敬 子

はじめに

中世物語評論書の一つ『伊勢源氏十二番女合』（以下、『女合』と記す）は、『伊勢物語』と『源氏物語』に登場する女性をそれぞれ十二人ずつ選び出して、一番ごとくその優劣を競うという趣向の作品である。『伊勢物語』・『源氏物語』の女性評が対比的に述べられたうえで具体的に価値判断が示されており、当時の人物理解を知るにあたって甚だ興味深い問題作といえよう。

早くに、片桐洋一氏によつて『女合』中の『伊勢物語』の人物比定が鎌倉期に成立した冷泉家流『伊勢物語』注釈書に基くことが指摘され、『女合』の成立も鎌倉時代と見なされてきた。⁽¹⁾しかしながら、成立年代につ

いては、室町期の『源氏物語』梗概書である『源氏大綱』の類との関係から室町中期まで下げるべきであろうと、稿者は考えている。⁽²⁾

また、近年、中島正二氏によつて精力的に『女合』の伝本研究が進められ、従来の内閣文庫本・群書類従本の欠損部分を補う福井市立図書館本、系統の異なる穂久邇文庫本が紹介された。⁽³⁾ただ、内容面からの作品研究は未だほとんど手がつけられておらず、現在でもなお古典注釈・享受資料としての扱いにとどまっていて、類似する『四十二の物あらそひ』『花鳥風月』の研究状況と比較してもその差は歴然としている。本稿では、『女合』という室町期の文学作品を読み解く試みの端緒として、従来等閑視されてきた『女合』序文について考察したい。

近き御代の御事にもや、二月十日あまり、南殿の花盛りに吹く風も折をしえたるのどけさなるべし。君も移りきこえたまへば、太后の宮をはじめ奉りて、女御、更衣おはします限りは侍ひ給はぬも侍らず。樂人など召しいでて、道々に足れるはみな選りすぐらせ給へば、糸竹の声は雲居を響かし、舞人などともきよらを尽くさせ給ふ。「袖さしかざせる姿どもは、紅葉の蔭には侍らねど、今日はあはれとも誰かは見侍るらん」とのたまひて、君うち笑ませ給へば、女房の限りは答へまうき御けはひなるにこそ。御かはらせ参りて、花有喜色なりなどいへる題、ひたぶるにつかうまつる。唐の大和の、うちまぜてひねもすがめぐらし給ふ。明日もと契りけむ萩が花ならでも、月はげに宿る顔なりけり。大宮より大納言といへる女房召し出でて、「明日もかく御覧せんなるべければ、珍らかなる御遊びの庶幾はるあまりに、古き物語にあらはれ侍る女を番定めて、司、位を言はば何の争ひかは侍らん、ただ品、心の時によれらんふしぶしにつけて、雌雄を奏し給へ」とて、御

硯召して、左伊勢物語、右は光源氏に侍る人々を十二番に定め、御心の浮かぶにまかせて、自らあそばして賜ぶ。大納言君賜て、「物を合はする例しは多かるることながら、あるは歌、あるは絵、匂ひ、扇など折にふれ、事によそへて勝ち負けはあへなむかし。遠き昔の人をいかさまにか引き比べ推し量られ侍るなんと、愚かなる心の間はかかる道にも深かりけり。畏き仰せごとのぶる例しのあらまほしう」とて、片はし片はし言ひ定め侍らば、古りにし玉の磨かぬかたの恨みはいとそらおそろしからずと言ふことなし。(本文は福井市立図書館本を使用し、適宜漢字に改め句読点、傍線を付した。以下同じ。)

右に掲げた序文から、「女合」の行われた場の設定が『源氏物語』花の宴に依拠していることは明らかである。ささらぎの二十日あまり、南殿の桜の宴させたまふ。后、春宮の御局、左右にして、まうのほりたまふ。弘徽殿の女御、中宮のかくておはするを、をりふしごとにやすからず思せど、物見にはえ過ぐしたまはで参りたまふ。日いとよく晴れて、空のけしき、鳥の声もこちよげなるに、親王たち、上達部よりはじめて、その道のは、皆探韻たまはりて、ふみ作

りたまふ。(略) 楽どもなどは、さらにも言はずととのへさせたまへり。やうやう入り日になるほど、春のうぐひすさへづるなどいふ舞、いと面白く見ゆるに、源氏の御紅葉の賀思し出でられて、春宮、かざしたまはせて、切に責めのたまはするに、

(新潮古典集成)

桜咲くうらかな二月中旬、紫宸殿に帝・后が揃って出御され、大宮人らは舞楽や詩歌管絃に歓を尽くす。興のおもむくままに帝自ら、『伊勢物語』と『源氏物語』の「女合」を企画して、大后宮の女房大納言の君を召し出して判者を命じた。桜花の宴が催される穏やかな春日は、四海波静かに治まる御代にふさわしい。『四十二の物あらそひ』でも、よく似た時節の設定がなされている。

昔、奈良の帝の御時にや、折ふし春宮の御方へ渡らせおはします。二月中の六日のころなるに、南殿の桜は夕映へに飽かぬ色を添へ、汀の柳は萌黄の糸を乱したるかと思はれ、よろづに眺めおはします。春宮におほせけるは、「春と秋といづれ劣らぬことなれども、なをもののはれをとどめ、ことに触れて悲しきは秋の夕べとこそ候へ。唐土には春を憐れみ、我朝には秋をあはれみ候とこそ見え侍れ。いかに定

めおぼさるるにや」と仰せことあれば、中宮の御方より緑の薄様に

おほかたは争ふころといひながら心一つに秋を

さだめん

とあそばして小侍従の君して参らせ給を御覧じて、

「女は秋をあはれみ候、ことほりまことに」とて笑はせおはします。上もいつより御つれづれにおほしめし、「これをはじめとして、四十二の物あらそひあるべし」とて、御前にさぶらはぬ典侍など面々に御使ありければ参り給ふ。

『四十二の物詠』(慶應義塾図書館蔵)

だが、『女合』序文の『源氏物語』へのこだわりは、『四十二の物あらそひ』よりもはるかに深いものがあった。この宴には花の宴ばかりか紅葉賀、それ以外にも『源氏物語』の様々な表現や語彙がちりばめられている。序文傍線部は、それぞれ『源氏物語』の以下の箇所を念頭に置いて記されたものであった。

ア垣代など、殿上人・地下も、心殊なりと世人に思はれたる、有職のかぎりとのへさせたまへり。

(紅葉賀)

イわざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲

居を響かし、すべて言ひ続けば、ことごとしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。(桐壺)

ウ一年の春宮の御元服、南殿にてありし儀式、よそほしかりし御ひびきにおとさせたまはず、(略)おろそかなることもぞと、とりわき仰せごとありてきよらを尽くしてつかうまつれり。(桐壺⁽⁴⁾)

工(帝)「こころみの日にかく尽くしつれば、紅葉の蔭やさうざうしくと思へど、見せたてまつらむと心にて、用意せさせつる」など聞こえたまふ。つとめて、中将の君

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うち振

りし心知りきや(略)

唐人の袖ふることは遠けれど立居につけてあは

れとは見き(紅葉賀)

才侍従とて、はやりかなる若人、いと心もとなう、

かたはらいたしと思ひて、さし寄りて聞こゆ。

鐘つきてとぢめむことはさすがにて答へまうき

ぞ且つはあやなき(末摘花)

力今はただ、品にもよらじ。容貌をばさらにも言はじ。いとくちをし、ねぢけがましきおほえだになくは、ただひとへにもそのままやかに、静かなる心の

おもむきならむよるべをぞ、つひの頼み所には思ひおくべかりける。(帚木)

キ目も見えはべらぬに、かくかしこき仰せ言を光にてなむ。

かしこき仰せ言をたびたびうけたまはりながら、自らはえなむ思うたまへ立つまじき。

くれまどふ心の闇も堪へがたき片端をだに、晴るくばかりに聞こえまほしう侍るを(桐壺)

序文には、単なる舞台の設定として以上に、深部まで『源氏物語』の浸透が色濃く見受けられる。「女合」が催された宮廷はいわば『源氏物語』の世界に擬えられた物語空間である。『源氏物語』の賀宴における舞楽や管絃・応制の詩歌が桐壺帝の聖代を象徴するものであったように、「女合」もまた当今の御代のためたさを表象するものとして位置づけられている。

その際、帝が選んだ「女合」の女性の数はそれぞれ十二人であった。これは『伊勢物語』の古注「凡、業平一期会所女、三千七百三十三人也。其中に、此物語には、唯十二人をえらび入たる也」(冷泉家流伊勢物語抄)に基く数である。⁽⁵⁾

十二番の女の名寄せと勝敗は次の通り。()内は稿

者が付したものである。

左方

右方

五條大后宮（勝） 忠仁公良 桐壺更衣 大納言女

房女

二條大皇大后宮（持） 贈太 薄雲女院 先帝御女

政大臣長良卿女 母絵

継女

有常女君 母良門女 紫上（勝） 兵部卿宮女

恋死君 三條右大 葵上（勝） 引入大臣女

臣良相卿女

夢語君 右兵衛督 朧月夜内侍督（勝） 弘

紀名虎女 徽殿御妹

小野小町（勝） 出羽郡司 女三宮 朱雀院御女

小野常割女

齋宮女御 文徳天皇 権齋院（勝） 式部卿宮

御女 女

伊勢（持） 伊勢守繼 明石上 前播守女

蔭女

有常女姉君（勝） 空蟬君 大納言女

中納言娘君 母名虎女 夕兒上（勝） 母三位中

将女

染殿内侍（持） 良相女 蓬生君 常陸宮女

初草君（持） 阿保親王女 玉蔓内侍 致仕太政大

平城天皇御孫 臣女

『伊勢物語』を左方、『源氏物語』を右方として十二番、合計二十四人の女合が行われることとなった。まず「女合」の人数からして『伊勢物語』古注の説が基本になつており、左方に置かれたことから『伊勢物語』が『源氏物語』よりも重視されているようである。

ところが、これは必ずしも同時代の見方と一致するわけではなかった。『花鳥風月』の扇絵の主は業平ではなく光源氏だったわけであり、『四十二の物あらそひ』でも『源氏物語』が四番にわたって取り上げられるのに対し、『伊勢物語』は全く出てこない。さらに、『花鳥風月』とほぼ同時代の『異体千句』（康正二年・一四五六）の序文は『源氏物語』を『伊勢物語』よりも上と明言している。

『異体千句』序文

第十に源氏伊勢物語の哥の詞をもちいらるゝ扇の絵に、女の形かきたるを源氏の心か伊勢物語の心かとうたかふ事の有しを、花鳥風月といひけん、かん

きのあつさによせて問しかは、六条の齋宮のは、御やすところのなのりしてあらはれたると云事は、無下に近き世のつくり物語なるへし。抑かの絵合の巻に、在五中将の名をやくたさむこと侍しは、伊勢物語を正三位にあはせられて猶もあらそふかた有けらし。須磨の巻の出来て、絵のけふみなおしゆつられけんは、源氏にならふへきものなきにこそ。時代の前後をいはずして、五十四帖を上るの句にをかれぬる心なきにはあらさるへし。

(古典文庫『千句連歌集三』)

この異体連歌「賦源氏伊勢物語哥詞連歌」は、長句に源氏歌詞、短句に伊勢歌詞を賦物にした百韻である。『異体千句』序文は、絵合巻を根拠にして「源氏」が「伊勢」より勝ると主張しており非常に興味深い。このように、同時代の作品には『源氏物語』をより重視する傾向がうかがえ、『女合』においてもその序文が『源氏物語』の強い影響下に成ったことは先述した通りである。では、にもかかわらず、何故「女合」の形式において『伊勢物語』が優遇されたのであろうか。この問題を考えるにあたって、まず判者である大納言の君に着目して検討を行うことにする。

二

『八雲御抄』(国会図書館本) 卷第二作法部

一、判者

以堪能重代爲其仁。雖堪能非重代者能々可有儀。雖重代非堪能者萬人不可聽。兼兩事携此道年久之人爲其仁。(略) 女房爲判者事非普通事。

(『八雲御抄の研究 正義部 作法部』)

内裏歌合の判者ならずとも、帝直々の声掛かりともなれば、大納言の君の晴れがましさと重圧がいかにかりかであるか想像に難くない。その心中「古りにし玉の磨かぬかたの恨みはいとそらおそろしからずと言ふことなし」は、『韓非子』に見える「卞和泣玉」の故事を踏まえていた。この故事は『蒙求』などの幼学書を通じて広く受容され、「血の涙」「紅の涙」の典拠として『俊頼髓脳』などの歌学書にも見え、基本的には国王に対する諷諭の文脈で理解されていた。⁽⁶⁾

『蒙求』(卞和泣玉)

韓非子曰、楚人和氏得玉璞楚山中、奉獻厲王、王使玉人相之、曰石也、王以和爲詐、而別其左足、及武王即位、和又獻之、王使玉人相之、

又曰石也、王又以和爲詐、而別其右足、文王即位、和乃抱其璞而哭於楚山之下、三日三夜、泣盡而繼之以血、王聞之、使人問其故、曰、天下之別者多矣、子奚哭之悲、和曰、吾非悲別也、悲夫寶玉而題之以石、貞士而名之以詐、此吾所以悲也、王乃使玉人理其璞、而得寶玉焉、遂命曰和氏之璧

(新釈漢文大系)

『蒙求抄』卷二

卞和―史記楚世家ニハナイソ厲王成王ニ六借事カアルソ玉人トナリトモ玉人トナリトモトレテ大事モナイソ玉スリソウソヲツイタト云テ其罪過ニ足ヲタツソ五刑ノ一ソ右ノ足ヲキツテ又左ヲキツタソ兩ノ足ヲキラレテハ何カイキラレウソ足ノスチヲキルトチヤトヨメテ候ソ三日三夜ナイテイタソ足キラレタ物コソ多ケレ是ホトマテハナケクソト云ヘハ足ノキラレタカ悲テハナイ貞士ニイツハリヲ申タト仰ラレタカ悲ト云ソ二代マテ玉テナイト云トナレトモマツサラハスラセテ見ヨト云テスラセタレハ玉ニナツタソ

(抄物資料集成)

『榻嶋曉筆』第十七和氏玉

一、又和氏連城璧と申は、昔楚国に卞和といふ者、荆山に遊て玉璞とていまだ琢かざる玉の石のやうにて大き尺に余れるを求得、「世に類なき珠なるべし。琢かせて御覧あれ」とて、此を楚厲王に獻じ奉る。即玉造りを召して見せしむるに、玉人「これは石也」と奏す。其料浅からずとて、彼が左の足をきる。卞和罪なくして刑にあふといへども是を悲しまず。只天下に玉を知る者のなき事を悲しめり。其後武王即位有り。和又此璞を獻じ奉る。王悦び玉人に琢かせらるゝに、光なく「此石也」と奏す。武王大に怒り、又其右の足を斬らる。和荆山の中に捨てられて二十余年、猶命を存して此玉を抱き啼哭する事休ざれば、落る涙の玉にも血の色ならずといふ事なし。其後文王即位有て彼山に狩りし給ふ事三日三夜、卞和が兩足を斬られ泣悲むことを觀覽ありて、「天下に足を斬らるゝ者多しといへども、かく哭する者なし。其故如何に」と問給へば、和が云「吾全く此刑にあへる事をば歎かず。只君昏く臣諛て君子は退き佞人は進み、世の宝玉を知らずして還て我偽れり」とて兩足をきられ、美玉の頭れざる事を悲しむなり」と奏しけり。文王さらばとて其玉を召し、玉人

に琢かせらるゝに、其光天地に映徹せり。

(三弥井書店・中世の文学)

玉人(玉造り)が下和の玉の価値を正しく見抜けなかつたために、二代の王はあたらし美玉を無駄にしたばかりか、暗愚の例として末代まで伝えられてしまった。大納言の君は己れを玉人になぞらえ、『伊勢』『源氏』の女達を下和の玉に喩えて、その判に誤謬があることを危惧しまた恐懼する。もし判を誤れば、大納言の君が佞臣と責められるにとどまらず、彼女を判者に任命した帝に対する非難につながるかもしれぬと思つたからである。正しく玉の価値を世に示すことができるか否かは、帝の御代が聖代と呼ぶに値するか否かに直結する。「はかなき御遊び」であつても、帝の発案した文事が成功すれば、則ちそれは帝徳の発揚を意味するのである。「下和泣玉」の故事を引用することで、「女合」の大納言の君の判詞は政教性を帯びたのであつた。

三

『八雲御抄』巻第一正義部

歌合子細

一、一番左は可然人得之。(略)一番左は不可負。

先例負も多爲持。

歌合において、一番左は最も尊重される詠者が当てられた。『女合』で一番左に選ばれたのは『伊勢物語』の五条大后宮。対する右は桐壺の更衣、帝の妃同士の組み合わせである。以下、一番の全文を掲げる。

一番

左 五条大后宮 勝

右 桐壺更衣

左は文徳天皇の大后宮にて、君の賢うおはしますにしがひて、世を撫で民をめぐみ給ふことも浅からず、君をしもいさめ奉り給ふのみ也。周の文王の后は其の御代を保ち給はむことを願ひて、世を安んずることは人を得るにあり、人を得ることは縁にしかじとて、故ある臣下のむすめごとに請ひとりて、帝に奉られけると也。かかる例しまで引きおほさるるにや、御心だて、御すがたのやむごとなき際につけてもいひなずらへがたし。世継の物語などにも、この君をば花にたとへ奉るにこそ。父の君の老をさへのばへ給ふばかりに、あらぬ名をしもとりそへ給ふ。この御腹に王子生まれさせ給ひて、ひとざふ位につかせ給ふ、いとめめでたし。

右は桐壺の更衣、父は大納言などにて失せしにや、たづきなう成り行くまに、御宮仕に内裏に参られ侍りしを、帝ときめかせ給ひて年月はこなたにて明かし暮らし給ふ。かたへの人、みなそねみ思ひ給へらぬも侍らず。人の國にもかかることのおこりにこそ、世も乱れあしかりけれど、やうやう天が下のもてなやみぐさとなり給ふ。ほどなう王子うみ奉り給ふ。この御子、ひるこの御よはひのほどにや、御母の更衣なやみ給ふことありき。をこたりもやり給はで、夏の比はいとしも重うわづらはせ給へば、御里にまかでなむとし給ふ。帝ことの外に嘆きしづませ給ひて、「かねがねは後の位をだにもとおぼしめしながら、世のそしりもかとうち過ぐひこしを」などのたまひて、てぐるまの宣旨蒙らせ給ふ。更衣限りとて別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

り給ひて、命婦の君して尼君のもとに賜はせける。宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

御返し
荒き風防ぎし蔭の枯れしより小萩が上ぞしづ心なき

御服果てぬるまに参り給ひて、弘徽殿の御養ひのやうにて生ひ立給ふ。七歳の春、ふみの道に入りそめ給ふ。高麗より相人参れしに、鴻廬館にてあはせ奉り給ひて、行く末かけての御栄まで占ひさだめ、御容貌の光るさまにおはすめればとて光君と名づけ奉り、かの聖王の例しをうけ給ひて、十二にて初冠して源の姓を賜り給ふ。冷泉院の御宇に、太上天皇の位賜て、六條院と申けるにや。かくやむごとなく、才、徳に付ても、天下を驚かし給ふ君の母にて、所狭う思ひ給へ侍れども、その御代にもこらねたみおぼされし更衣なれば、今日の御遊びに選ばれ侍る判者にて、かしこき宮の御蔭をいかでか仰ぎ奉り侍らざるべき。

『女合』の五条太后宮が文徳天皇の後、染殿后明子を指すのは『冷泉家流伊勢物語抄』の注による（『和歌知識

抄』系統の注では仁明天皇后順子)。ここで注意すべきは、五条后宮明子の事績を述べる判詞が『伊勢物語』の内容に全く触れておらず、一首の和歌も引用しないことである。『伊勢物語』古注の世界では、五条后は業平の恋の相手の一人であった。しかし、『女合』の五条后宮はひたすら帝の政を支えた后妃の徳を賞賛されるばかり、引き合ひに出されたのが周の文王の後大姒である。

文王の后はとりわけ『毛詩』冒頭の詩篇によつて名高い。

『毛詩抄』卷第一詩序

關雎は后妃の徳なり。

(略) 只關雎一篇の序ぞ。其序に毛詩一部の事を云たと心得たがよいぞ。首序に關雎后妃徳也、とかいた。其に付て、惣じて風之始也とて詩之綱領を論ぞ。朱文公が心はさうは見まいぞ。關一 此の篇は后妃の徳を誉た樂歌であるぞ。曲禮曰、天子之妃曰后、注云后之言後也、執理内事、在夫之後也。天子は外にいて治め、后は後宮にいて内を治るほどこぞ。(略) 徳は得也で、我身に得てしたぞ。惣じて后妃たらうず人の徳は、まづ此詩に云やうに有うずる事ぞ。なぜに云ぞなれば、文王の后妃の徳は、

まつかう有るぞとて作ぞ。伊川が心得は、文王の后とさしつむるは悪ぞ。惣じて古今后妃のよいを云と心得たが吉ぞ。此義一往は面白けれ共、文王の后妃の爲に作た詩であるほどに心得事でもないぞ。

(略)

是を以て關雎は淑女を得て、以て君子に配せむことを樂ふ。憂・賢を進むるに在りて、其の色に淫せず。窈窕を哀び、賢才を思ふて、善を傷る心無し。是れ關雎の義なり。

是以關一(略) 此れには家内の化を説ぞ。后妃の願い事ぞ。君子とは夫をさすぞ。淑女は可然よい徳の有う女を得て、君子に配耦して、天下を治させ進らせたいと思はれたぞ。ちとも色に淫し、嫉妬の心は無いぞ。我一人寵を専らにせうとはせられぬぞ。

(略)

窈一と云は、女のうつくしいを常には云が、爰はさはないぞ。幽間也と注したほどに、奥く深き局町の處にいたを云ぞ。淑女がうつくしいぢやほどにぞ。賢徳な女を得て、文王に進せぬ事が悲しいと思はれたぞ。いつも只賢才を進らせたいと思ふぞ。

關雎(国風・周南)

關關たる雉鳩、河の洲シヅに在り。窈窕の淑女、君子の好たぐひき速たぐひなり。(略)

窈窕—窈窕は常にはなりのうつくしいを云が、淑女が美な心ちやほどに、かすかな奥深い處に居たと云心ぞ。心のよい方をば窈と云、貌のうつくしいを窕と云義あれども、是はわるいぞ。(略)女はまだよめ入をせぬ前を女と云ぞ。あはれうつくしい善女を求め、文王にまいらせて、とも／＼に天下を治さ

せまいらせいでと、大姒の思はれたぞ。嫉妬はないぞ。君子は文王を云。(略)注、速は仇と云字と同ぞ。餘所にあるではない、内にある三夫人九嬪の事ぞ。我下に百二十人の女がある。其をみな和せら

る、ほどに、皆中が吉つたぞ。幽閒は局町の深いぞ。幽はかすかに奥ぶかいぞ。間はしづかなぞ。貞専は心のたゞしく、聊爾チヤウニに無ナシぞ。此注の心は、后妃の善女を得て、文王君子に配せうと思ふぞ。近注の心は、配合配遇は后妃にみたぞ。箋云、能宜—衆妾の中にも恨を抱イダク者が有うすほどに、其速を求めて和らげられたぞ。八十一の御妾などは、職卑シク徳小ナル程に、怨ずと云事はないぞ。是をも淑女の徳を以て和好して一點の恨もなく和したは后妃の徳也。(略)

(岩波書店『毛詩抄詩経』)

『女合』の五条大后宮についての評言は、ほほ中世の『毛詩』解釈における文王の后に依拠したと言つてよい。『毛詩』が文王の後の頃から始まるように、『女合』は文徳后明子の徳から説き起す。おそらく文徳天皇の后と文王の后は、その夫の諡号によつて連想の糸で結ばれたのであろう。「文母」と讃えられた古代中国の伝説的賢后(8)に准えられ、明子は日本の文徳の后として讃仰されたのである。大姒が優れた子を数多く育て、後宮を治め文王を支えて周王室の繁栄を導いた跡をなぞるように、明子も『大鏡』に拠りつつ藤原北家一門の榮華を築いた聖徳の后として描かれた。

『大鏡』上

文徳天皇と申しける帝は、仁明天皇の御第一の皇子なり。御母、太皇太后藤原順子と申しき。その後、左大臣贈正一位太政大臣冬嗣のおとどの御女なり。この帝、天長四年丁未八月に生まれたまひて、御心あきらかに、よく人をしろしめせり。(略)
次の帝、清和天皇と申しけり。文徳天皇の第四の皇子なり。御母、皇太后宮明子と申しき。太政大臣良房のおとどの御女なり。(略)御母、二十三にて、

この帝をうみたてまつりたまへり。貞観六年正月七日、皇后宮にさがりゐたまふ。後の位にて四十一年おはします。染殿の后と申す。その御時の護持僧は智証大師におはす。さばかりの仏の護持僧にておはしましたしむに、この後の御物の怪のこはかりけるに、などえやめたてまつりたまはざりけむ。前の世のこのにておはしましたしけるにやとこそおぼえはべれ。

(略)ただし、この大臣(良房)は、文徳天皇の御舅・太皇太后宮明子の御父、清和天皇の祖父にて、太政大臣・准三宮の位にのぼらせたまふ。年官・年爵の宣旨下り、摂政・関白などしたまひて、十五年こそはおはしましたれ。おほかた公卿にて三十年、大臣の位にて二十五年ぞおはする。この殿ぞ、藤氏のはじめて太政大臣・摂政したまふ。めでたき御有様なり。(略)多かる中にも、いかに御心ゆき、めでたくおぼえてあそばしけむ、と推しはからるるを、御女の染殿の後の御前に桜の花の瓶に挿されたるを御覧じて、かくよませたまへるにこそ。

年経ればよはひは老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし

后を、花にたとへ申させたまへるにこそ。

実のところ、歴史上の染殿后明子その人あまり特筆すべき業績はない。染殿后といえは、何よりも世人の念頭に浮かぶのが紀僧正の紺青鬼説話であつた。⁽⁹⁾増補本系『大鏡』が露骨にほめかしたこの醜聞について、『女合』は「あらぬ名をしもとりそへ」と、極めて抑制的かつ最小限の言及にとどめている。明子について、あえて五条大后宮の呼称を用いたのも、「染殿后」にまつわるスキヤングラスなイメージを除去し、高潔な后妃像を提示するためであらう。右方桐壺の更衣に対する判詞からも、后妃の徳を重んじる『女合』の意図を看取できる。

桐壺の更衣も、周公旦や武王発の母大姒と同じく、光源氏という偉人の母であつたことが評価された。『女合』は「かの聖王の例しをうけ給て、十二にて初冠して源の姓を賜り給」と光源氏の元服に触れるが、十二歳元服は古代の聖天子の嘉例を踏まえたものであつたといふ。⁽¹⁰⁾

『河海抄』

十二にて御けんふくし給ふ

礼記曰天子之子十二而冠

春秋公羊伝襄公年十二而冠也依八代記即小昊亦十

二而冠則知天子諸侯幼即位者皆十二而冠矣

左伝曰歳星一周天天道大備故自夏殷天子皆十二而冠

宋書志天子諸侯近十二遠四十五必冠矣

小吳顛頊夏殷帝王周文王魯襄公皆十二而冠云々

(略)

(角川書店『紫明抄・河海抄』)

しかし、桐壺の更衣は、帝の過剰な寵愛を独占することとて後宮の調和を乱す元凶となり、傾国の妃と白眼視された。その点で「こころ妬みおぼされし」更衣には、『毛詩』に示された後宮を治めて治世を支える后妃の徳が決定的に欠けていたがために、負けと判定されたのであった。

一方、文徳后明子は文王の後のイメージをそのまま転用され、どこまでも観念的な儒教的理想の後として叙述される。それは帝や並み居る后妃達、とりわけ大納言の君が仕える大后宮の御前で聖代を言祝ぐ場にふさわしいものであろう。「今日の御遊びに選ばれ侍る判者にて、かしこき宮の御蔭をいかでか仰ぎ奉り侍らざるべき」との判断は、宮廷女房である大納言の君としては当然の振る舞いなのである。

このように、序文に謳われた政教性は、『女合』一番

の内容と判定に歴々と反映していた。そしてまた、南殿という公的空間において、架空の妃よりも実在した后妃の方に、(建前上であつても)そこからの規制と配慮がより強く働くことは十分推測できるのである。⁽¹⁾

四

さて、『女合』には、『伊勢物語』から后妃だけでなく女房が数人選ばれているが、女房の中でもとりわけ別格というべきは小野小町であった。小町の重みは光源氏の正妻女三の宮と対になっていることから窺える。

六番

左 小野小町 勝

右 女三宮

右は、朱雀院御なやみ日にそへておもり給へば、御代を春宮に譲り給ふ。女宮二所おはしましけるを、御いとをしみなのめならず、いかさまにか成りても果て給はんとすらんなど、うち歎かせ給ひて、二宮をば柏木右衛門督、三宮をば六条院、御後見承り給ふ。三宮は、ことに御容貌も世になう艶なるかたにおはしませば、佛の御相など様々聞こえあるさまなべくとも、この御姿にてや、推し量かられ侍らん

なむ。げに青柳の朝露にうちなびく影はいかなる花
にかは、けおされ侍るべき。目の前にさとうち覆ふ
心地せらるゝ。院もいとかしこう思ひかはし給ける
に、柏木の右衛門督、物のたよりにふと見初め奉り
て、静心なう思ひわたりければ、御めのとの侍従に
語らひて、おりくゝの御文など通ひけるにや。此の
ころは紫の上なやみ給ひて、院もひたすらこなたに
おはしまして、少し御心清げなれば、宮の御方へ渡
らせ給ふ。思ひかけず入り来給ふめれば、取り乱る
物どもこしらへあへず、督の文など褥の下にかいく
るみて置けるを、院見つけ給ふにさだくゝと事あら
はれて書ける文なりけり。取りて帰らせ給ふ後は、
まことの御ころざしもえおはしませず。御子をさ
へ産み給へば、御身にも悔しきことの御歎きのみな
るにぞ。御産屋などには、我が御子のごとくた
びくゝおはしまして、五十日の御祝ひに若君をいだ
き奉りて、宮の御耳にあてて

誰が世にか種をまきしと人間はばいかが岩根の
松は答へむ

宮は、かひふして消えいり給ふ。督にもかかること
気色ばみ給へば、物病みになりてつゝに失せ給ひぬ。

いまはの時に、侍従につかはしける

いまはとて燃えむ煙もむすほほれ絶えぬおもひ
をなをや残さむ

宮、御覽じて

立ち添ひて消えやしなまし憂きことをおもひこ
がるる煙くらべに

宮は、父の帝にも御いとま申させ給ひて、御髪下ろ
して入道の宮と申しき。

左は、色好みの家なるべし。さるべくは、仲らひ
の方にとりては右に申くらぶべきかたも侍らず。姿、
心の世にすぐれ、大和歌の道にさへなべての聞こえ
にも侍らず。ちはやぶる神代に始まれるわざなるを、
古きもの言葉に「いにしへのことをも歌の心をも
知れる人、わづかにひとりふたり」と言ひて、すな
はち小町を加へたり。人の國にも女はみめ心につけ
て、賢き方の聞こえ侍るめるは涙の真砂のごとくな
れど、道にとりては、あるは絵、あるは文字などに
は見え侍れど、唐の歌などにもその名に高きはまれ
なるやらん。昔はいざなみのみこと、あなにかやと
詠め、下照姫のあもなるやおとたなはたのと詠み、
近き世には衣通姫の蜘蛛のふるまひと言ひ、采女が

浅香山と侍しは浅からぬ心にもぞ侍るらむ。又、こ
らの撰集などに見え侍る女の名はあげてかぞふべ
からず。かの古今集は貫之(らがとりそへるとやらん
侍れども― 穂久邇本)御ゆるされに預からずは、は
たあるべからず。「ひとり古今のあいだに歩む」な
ど主なき詞にしも侍らねど、女のうへにひきとりて
は小町にやゆづり聞え給ひつらんかし。

煩を厭わず六番全文を引用したのは、この番の組合
せが一見して不似合いだからである。女三の宮と小町に
は、番になるべき共通点がほとんど存在しない。女三の
宮に関して、柏木との密通が眼目として述べられるのは
当然であるが、小町にはそれに類する記述が見当たらな
い。

島原本『和歌知頭抄』

色好みなる女は、たれぞや。

こたふ、伊勢物語に色好みとは、たしかにかきさだ
めたる女は、みな、小野小町がこと也

(『伊勢物語の研究(資料編)』)

『伊勢物語』古注の世界では、小町は全き「色好み」と
して認識されていたのに、五条大后宮の場合と同様、こ
こでも『女合』は『伊勢物語』章段の内容と古注釈を無

視しているのである。

判詞に描かれた小町は『古今和歌集』仮名序を背景に、
神代から連綿と続く女歌の系譜に連なる天才歌人に他な
らない。(1)「ひとり古今のあいだに歩む」の一節も、やは
り『古今和歌集』真名序「民業一改。和歌漸衰。然猶有
先師柿本大夫者。高振神妙之思。独歩古今之間」を踏ま
えるものであった。それは「主ある言葉」、本来柿本人
麻呂に冠せられた賛辞ではあるものの、女流においては
小町にこそふさわしく、小町が人麻呂同様唯一無二の存
在であると宣言しているのである。『女合』の小町は、
中世の一般的なイメージの零落した老女でもなく男を手
玉に取る驕慢な浮かれ女でもない。和歌によって末代ま
で名を残す才媛の誉れは、例えば謡曲「草子洗小町」や
御伽草子『神代小町』に描かれた小町像と共通している。
しかも、それは常に『古今和歌集』の権威と栄光に結び
つくことで、さらに光彩を増しているのであった。

謡曲「草子洗小町」

めでたき御代の歌合。めでたき御代の歌合。詠じて
君を仰がん。時しも頃は卯月半ば。清涼殿の御會な
れば。花やかにこそ見えたりけれ。かくて人丸赤人
の御影を掛けおのおの詠みたる短冊を。われもわれ

もと取り出し。御影の前にぞ置きたりける。さて御前の人々には小町を始め河内の躬恒 紀の貫之 右衛門の府生壬生の忠岑 ひだりみぎりに着座して既に詠をぞ始めける。

(謡曲大観)

『神代小町』

昔、清和天わうの御時に、をの、こまちといふ、上わらほありけり、世にたくひなき、色このみの、遊女とそ聞こえし、そのよそほひ、あたとたをやかにして、楊柳の、春の風に、みたる、かことく、そのかほばせ、いようとあさやかにして、ふようの、あかつきの浪に、うかへるにいたり、かの李夫人の玉のすかた、やうきひの花のかほばせも、かくやおもひしられたり た、し、容色せんけんの、世にたくひなきのみにあらず、敷島の道にも、ゆうにすくれて、花をめて、鳥をうらやみ、霞をあはれみ、露をかなしめる心詞、そとをり姫の流を、まなひえたり その歌の体をいは、よきおふなの、なやめる所あるに、たり、あはれなるやうにてつよからず、つよからぬは、をうなの歌なれはとなり 紀のつらゆきもほめたる也 筆をそめて、和歌を詠し、月の夜をむかへては、きんをとつて、むえきよくをしら

ふ、くちにほうわうくはんをふけは、りやうぢんめくりて、こゑなめらかなり、手に、あふむはいをとれは、かん月おちて、かげしつかなり

それ、わか朝には、人丸を歌のひしりとして、やまのへのあか人、大とものくろぬし、さる丸大夫、ふんやのやすひて、あり原のなりひら、うち山のそうよしみねの僧正、このほかの歌人、つくはねの、このほかのにも、しげ木のはと、おほかめれと、などや小町か歌には、をよばざりけん

(室町時代物語大成)

『女合』よりもはるか二百年以上前、文筆の才によつて後世にその名を残すことこそが女房の本懐であると『無名草子』が既に表明している。

さらば、などか、世の末にとどまるばかりの一ふし、書きとどむるほどの身にてはべらざりけむ。人の姫君、北の方などにて隠ろへばみたらむはさるることにて、宮仕人としてひたおもてに出で立ち、なべて人に知らるばかりの身をもちて、「このころはそれこそ」など人にも言はれず、世の末までも書きとどめられぬ身にてやみなむは、いみじく口惜しかるべきわざなりかし。昔より、いかばかりのことかは多かめれ

ど、あやしの腰折れ一つ詠みて、集に入ることなどだに女はいとかたかめり。まして、世の末まで名をとどむばかりの言葉、言ひ出で、し出でたるたぐひは少なくこそ聞こえはべれ。いとありがたきわざならぬ。

(新編日本古典文学全集)

小町はまさにそうした理想を実現した最初の女房であった。⁽¹³⁾くわえて、『古今和歌集』の歌人であるために、醍醐天皇の叡慮に叶ったとして一層その面目をほどこしたのである。判詞によれば、女流歌人は勅撰集にあまた数えることができるけれども、『古今和歌集』の場合はまた特別であるという。

かの古今集は貫之(らがとりそへるとやらん侍れども)御ゆるされに預からずははたあるべからず。

(一)内は穂久邇文庫蔵本の本文によって補った。

古今集歌人の名譽は延喜聖代の威光に裏付けられていた。たとえ撰者の判断に少々過誤があつたとしても、『古今集』の歌は、延喜の帝の名のもとに末代まで仰がれるのである。おそらく右の一文は『無名草子』の次の記述を意識したものではないだろうか。

『古今』こそ、古言いづれもと申しながら、返す返すもめでたくはべれ。歌の良し悪しなど申さむこと

は、いと恐ろし。撰べる人々、たとひ思ひ誤りてよろしき歌を入るとも、帝御覽じ咎めさせたまはざらむやは。

『無名草子』が希求した女房の理想のあり方は、『女合』の判者にも引き継がれたと思われる。そして、小町の姿は、『女合』の判者に帝が選んだ大納言の君に重なってくるだろう。優れた歌人が輩出して勅撰集が編まれることは聖代の証しであつた。何故、小町が女三の宮との番になったのか詳らかではないが、二品内親王に、出羽郡司女が文雅によつて圧倒的な勝利を収める結果はゆるがない。小町の偉業は隔絶した身分の差をも超えたのである。廷臣として文事を以て奉仕する大納言の君なればこそその判断であろう。

その見地から、次の伊勢もまた正しく評価されねばならない。伊勢は小町と並んで延喜聖代の才女として、後代から讃仰された女房歌人である。⁽¹⁴⁾『無名草子』が熱く語った女房の理想は伊勢についても同じく当てはまる。

八番

左 伊勢 持

右 明石上

左は、七條の太后宮につねは侍しにや。寛平の帝お

りおり御覧じけるが、皇子ひとところうみ奉りけり。大和歌の道におさおさ聞こえ侍るとなり。この道は秋津島のみりなるが故に、その人のめいばくならずと言ふことなし。伊勢物語といへることは、かの女書き選びて宇多の帝に奉けるよし、題号につけて伝ふる人も侍るとかや。猶はなはだしき誉れなるべし。(右方明石上の条、略)此の番、いづくを雌雄とも思ひわかれ侍らず。右はおぼろげならぬ方にいひとられ、御子の末まで栄えのほり給御徳にまかせ、左は才のいと浅からず世に名の高きかたにひかれ侍れば、なずらへて持などにもや侍るべき。

伊勢は宇多帝の寵を受け親王を産んだことではなく、和歌の才を認められ、『伊勢物語』を書いて帝に献上し、『伊勢物語』作者の令名を後世まで残したことで評価されたのである。

『冷泉家流伊勢物語抄』

凡、伊勢物語と云名に付て四の義有。

一、業平死後に彼妻なりければ、伊勢、業平の草案したりしを中書して亭子院に奉る。仍之作者に課て伊勢物語と名付る也。

同じく受領の女であっても、玉の輿に乗って子孫が繁栄したことでみれば、伊勢は国母を産んだ明石の上(右条「御むすめの君は紫の上の養ひにて春宮へ参り、国の御母とならせ給ふ。めでたき御宿世なり」)に及びもつかない。小町ほどのスケールの大きさはないにしても、判者大納言の君が伊勢に小町と同質のものを見出していたのは明らかである。単に文才・歌才の素晴らしさだけではなく、それを以て帝の命に応え文雅の華を咲かせたことが重要なのであった。

おわりに

五条大后宮が后妃の理想であるのに対し、小町と伊勢は宮廷女房の理想である。それぞれの立場から、帝の御代を支えた賢女の鑑としての女性像が『女舎』の判詞に描かれていた。少なくともここには、文芸的というよりも政教的な性格が色濃く表れている。それは序文に記された「女舎」の場がもたらしたものと見えよう。そしてそこから新たに、『女舎』の創作意図や作品の性格の検討が必要になってくるだろう。また、序文のもたらしたこうした作用が『伊勢物語』部分に顕著に現れるのも興味深い。『源氏物語』という作り物語の内部で、光源氏

との関わり以外に描かれようのない女達に比較して、実在した著名な人物である五条太后宮、小町、伊勢が、『伊勢物語』を超えて外部の事績や説話を自由に用いて造型されたのも一因と考えられる。

もとより、序文の場の影響が『女合』の全てに及んでいるというわけではない。『女合』という作品全体の把握には、さらに『源氏物語』についてもその人物の描かれ方や原典本文との距離、梗概書(就中『源氏小鏡』)との関係、そして『伊勢』『源氏』残りの九番の分析等々、考察するべき課題は多いが、それらに關しては稿を改めて検討したいと思う。

註

- (1) 片桐洋一『伊勢物語の研究(研究編)』・『伊勢物語の研究(資料編)』(明治書院、一九六八・一九六九)。
- (2) 安達(尾田)敬子『伊勢源氏十二番女合』の成立基礎(『国語国文』五四卷一―二号、一九八五、『源氏世界の文学』清文堂出版・二〇〇五に再録)。ただし伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』(東京堂・二〇〇一)は、『伊勢源氏十二番女合』の項目に「鎌倉期の成立」と記載する。
- (3) 中島正二「福井市立図書館蔵『伊勢源氏十二番女合』

について」(『汲古』二六、汲古書院、一九九四)、「福井市立図書館蔵本『伊勢源氏十二番女合』翻刻」(『三田国文』二一―二二号、一九九四)、「徳久邇文庫蔵『伊勢源氏十二番女合』」(『野鶴群芳』古代中世国文学論集)、笠間書院、二〇〇二)、『伊勢源氏十二番女合』の本文」(『むろまち』九号、二〇〇五)。

- (4) 『源氏物語』中「きよらを尽くす」の用例は、桐壺を含めて七例。基本的に儀式や賀宴の際の調度品・装束に贅美を尽くす意に用いられる。『増鏡』「烟の末々」の宗尊親王元服の段は、桐壺巻の光源氏元服を意識して叙述されるが「御門の御元服にもほとほと劣らず、内蔵寮何くれきよらを尽くし給ふ」とある。

- (5) 書陵部本『和歌知頭集』には次のようにある。(傍線は『女合』の人名と一致するもの)

鳥、かの十二人の女はたれくぞ。はや、その名をあげ給へ。
風、第一二ハ雅楽のかみ紀有常がむすめ。第二二ハ忠仁公の娘、文徳天皇の后、そめ殿の后也。第三二ハ出羽郡司小野のよしざねがむすめ、小野小町也。第四二ハ閑院左大臣冬嗣のむすめ、仁明天皇の后、五条后也。第五二ハ中納言ながらのむすめ、清和天皇の后、二条の后也。第六二ハ中納言長谷雄卿のいもうと、恋じの女也。第七二ハ文徳天皇の御むすめ、恬子、伊勢斎宮也。第八二ハつくしのそめがはの女、これには名なし。第九二ハ中納言行平のむすめ、清和天皇の更衣、貞数親王の御母也。第十二ハ

大納言登卿のむすめ、めづらしのまへ也。第十一ニ
八周防守在原仲平のむすめ、やしなひいもうと也。

第十二ニ八大和守藤原繼蔭がむすめ、いまの妻女伊
勢にありけるを、伊勢ぬきいだして、そのあとに后
宮の上童ましこのまへをいれたる也。この十二人の
女の、名をかへ、さまをかへて、このものがたりの
中ニ、八十余段にみだれかかてるなり。

また、九段「三河の国八つ橋」については、三と八にそ
れぞれ業平と関係した女性の数を読み取るのが、冷泉家
流『伊勢物語』注釈の説であることを、伊藤正義氏「謡
曲《杜若》考―その主題を通して見た中世の『伊勢物
語』享受と業平像について」(『文林』二号、一九六七)
が論じた。この注釈が室町期の文芸に多大な影響を与え
たことも、伊藤氏の論に詳細に指摘されている。『花鳥
風月』も葉室家に伝わる『伊勢物語』注釈の説として、
以下十一人の女を挙げる。

五条の後(仁明天皇の女御、文徳天皇の御母)・染
殿の後(良房の御むすめ、文徳天皇の后、水の尾の
御門の御母)・二条の後(中納言なりよしの卿の御
むすめ、清和天皇の御后)・伊勢齋宮(文徳天皇第
二の御むすめ)・かざりちまさの女(行平の卿の御
むすめ、貞数の親王の御母)・弁の御息所(右大弁
ひろかたの御むすめ、仁明天皇の御息所)・なま心
ある女(出羽の郡司小野良実がむすめ、小野小
町)・陸奥の国の介坂上とうなながむすめ・染河
の女(筑前国あをさの、たし、中原ちかむがむす

め)・つくも髪の水(治部のせう、藤原棟仲が母し
げこ)・よひと(伊勢)

(6) 『後頼髓腦』は「帝王の愚かにおはしまするためし
に申すなる事なり」とある。

(7) 『冷泉家流伊勢物語抄』

昔、東五条といふは、文徳天皇始は内裏西五条、後
は清和にゆづりて東五条に内裏を作りて住給ふ也。
おほきさいの宮とは、染殿后也。是は太政大臣良房
娘にて二条のきさきにはしうとめなればおほきさい
の宮といふ也。(四段)
あるじとは、五条の后也。是は二条の後の御しうと
め染殿の后也。(五段)

(8) 『列女伝』(周室三母)によつても、文王の后太姒の婦
徳は周知されていた。

太姒者、武王之母、禹後有莘氏之女、仁而明道、
文王嘉之、親迎于渭、造舟為梁、及入、太姒思媚太
姜・太任、且夕勤勞、以進婦道、太姒号曰文母、文
王治外、文母治内、太姒生十男、長伯邑考、次武王
發、次周公旦、(略)太姒教誨十子、自幼及長、未
嘗見邪僻之事、及其長、文王繼而教之、卒成武王周
公之徳、

君子謂、太姒仁明而有徳、

詩曰、大邦有子、俎天之妹、文定厥祥、親迎于渭、
造舟為梁、不顯其光、又曰、太姒嗣徽音、則百斯男、
此之謂也

頌曰、周室三母、太姜任姒、文武之興、蓋由斯起、

太妃最賢、号曰文母、三姑之徳、亦甚大矣

(9) 染殿後の美貌によつて高僧が愛欲の鬼と墮した説話は、

『今昔物語集』巻二〇一七、『宝物集』巻二、『古事談』

巻三一五、延慶本『平家物語』巻一二、その他謡曲、

御伽草子の引用に至るまで枚挙にいとまないほど後々まで引用された。

(10) 一例として、増補本系『源氏小鏡』（都立中央図書館

蔵）は以下のように注する。

三さいにてはかまぎ、七さいにて御文はじめ、十二にて御げんぶく。これはにんわうのはじめ、じんむてんわうのれいをひかれしなり。三くわうのよ、五ていの嘉例ともいふなり。十二の御とし、げんぶくし給ふ。その日みなもとのうちを給て、たゞ人になり給ふ。

(11) 実在する后に対する『女合』の斟酌は、二番左二条太

皇太后宮（高子）にも見いだせる。高子と業平の恋はあまりにも有名で隠しようがなかつたせいか、さすがに無視してしまうのは不可能であつたようだが、六十五段に基いた『女合』判詞では業平の和歌と行動だけを記し、本来描かれていた女の和歌や心情を一切削除してゐる。

いかにも密通から高子の影を消そうとする作為が露骨に見て取れる。そのうえ、密通が発覚した女の「この女のいとこの御息所、女をばまかでさせて、蔵にこめてしをりたまうければ、蔵にこもりて泣く」（『伊勢物語』六十五段）等の記述を削除して「内裏におはしましては君の御おぼえ浅からぬ御なからひにて、御いとこの宮なども

ひたみちにかしづき奉り給へば、なを世の光はみえ添ひ給にや、貞観の末に皇子うみ給て、又の年のほどにや、皇后にたち給」ともつぱら綺麗事の叙述に終始する。同

じ密通の后として右方薄雲女院について、以下のように遠慮の無い叙述がなされているとは対照的である。

（冷泉院が）大人び給にしたがひて源氏の君にいとようかよひおはしませば、世人も心しれるどちはかたはら痛きことに思ひ奉らぬも侍らず。母君もかくうたて侍るすぢなれば、それかあらぬかにいひたどらるるしもこそ、少しは罪あさかるべきわざなめるを、かうまでひたみちに写し給へるあさましきなごうち嘆きて

(12) 『古今和歌集』仮名序

この歌、天地ひらけ初まりける時より出できにけり。

天の浮き橋の下にて、女神男神となりたまへることを言へる歌なり。

しかあれども、世に伝はるることは、ひさかたの天にしては、下照姫にはじまり、

下照姫とは、天稚御子の妻なり。兄の神の形、丘、谷に映りてかかやくをよめるえびすうたなるべし。これらは、文字の数も定まらず、歌の様にあらぬこともなり。（略）

安積香山のことばは、采女のたはぶれよりよみて、葛城王を陸奥へつかはしたりけるに、国の司、事おろそかなりとて、まうけなどしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、土器

をとりてよめるなり。これにぞ王の心とけにける。
(略)

ここに、いにしへのことをも、歌の心をも、知れる人、わづかに一人二人なりき。(略) 小野小町はいにしへの衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、強からず。いはば、よき女のなやめる所あるに似たり。強からぬは、女の歌なればなるべし。(略)

衣通姫の歌

わが背子が 来べきよひなり ささがにの 蜘蛛

蜘蛛の振舞ひ かねてしるしも

(13) 『無名草子』はその女房論のなかで、小野小町を筆頭に挙げて高く評価する。

色を好み、歌を詠む者、昔より多からめど、小野小町こそ、みめ容貌も、もてなし、心遣ひよりはじめ、何事も、いみじかりけむとおぼゆれ。

女房の判詞に関する限り、『女合』と『無名草子』の共通点は少なくない。

(14) 『無名草子』

まことに、名を得て、いみじく心にくくあらまほしきためしは、伊勢の御息所ばかりの人は、いかでか昔も今もはべらむ。

『八雲御抄』 用意部

先年も古今の歌のことに心にしむを書番事ありき。

左右をばなにとなくつがひたりしを、小町夢に見えていはく「我と伊勢とはならびたる女歌よみにて侍

りしを、此御歌合に皆伊勢は左に是は右につがはれて侍ることふかきうれへ也」といふ。夢さめておどろきて彼卷物を見るに、番ごとに伊勢は左、小町は右なりけり。左右をさだめざりし事なれば、何となく番たるに自然にかくかける事、今を見えるにかつはおそれかつは随喜す。

(京都府立大学教授)